

中学校におけるコミュニケーション能力育成のための文法指導について

研修員 谷口勝彦

1 研究の趣旨

平成10年12月に告示された中学校新学習指導要領では、今後の英語教育の目指すべき方向として「コミュニケーション能力の育成」が、現行の指導要領に比べてもより一層明確に打ち出された。特に今回は目標に「実践的コミュニケーション能力」と謳われているように「実践的」という言葉が加えられているのが特徴である。ではその「実践的」コミュニケーション能力を育成するためには、どういうことに留意して指導を展開していくことが求められるのか、ということで「言語活動の取り扱い」という項目が新たに設けられ、その中で言語活動を行ううえでの「言語の使用場面」や「言語の働き」が具体的に示された。

「場面」と「働き」が例示されたということは、今までの文法シラバスに基づいた指導がコミュニケーション能力の育成に十分な効果を上げなかったことを考慮して、概念/機能シラバスの導入を示唆しているものだろうか。現行の教科書を活用して、概念/機能シラバスによる指導はいかに展開できるものなのか。それを考えるためには、教科書に現れる英文の、機能の観点からの整理がまず必要である。

本稿では機能の観点から新指導要領の項目に基づいて、教科書中の英文を分類し、入門期＝中学校段階での概念/機能シラバスの導入について論じてみたい。

2 研究の内容

(1)「概念/機能シラバス」とはどのようなものなのか、基本理念と背景について述べ、併せて問題点についても論じた。概念/機能シラバスとは言語の社会的機能に着目したもので、コミュニカティブ・アプローチの先陣を切ったものである。最大の欠点は言語の形式面を体系的に指導することが困難となることである。したがって入門期の生徒には混乱を招く可能性もある。

(2)現在県内で使用されている4種12冊の教科書に使われている文を以下の項目に分類してリストを作成した。

「言語の使用場面」

- ・あいさつ ・自己紹介 ・電話での応答 ・買い物 ・道案内 ・旅行 ・食事 ・家庭での生活
- ・学校での学習や活動 ・地域の行事

「言語の働き」

- ・意見を言う ・説明する ・報告する ・発表する ・描写する ・質問する ・依頼する ・招待する
- ・申し出る ・確認する ・約束する ・賛成する/反対する ・承諾する/断る ・礼を言う ・苦情を言う
- ・ほめる ・謝る

リストを作成して以下の点がわかった。

中学校3年間でどのような表現を習得することが期待されているか。

新指導要領の「機能」の項目の分類はかなり漠然としており、このままの分類では教室での活用は困難であろう。更に下位の分類が必要である。

3 研究のまとめ

新指導要領の改訂点のひとつ、「言語の使用場面と働き」の例示は、概念/機能シラバスの導入までを示唆したものではないようである。理由は、例示の仕方が、それを使つての指導を前提としていない。概念/機能シラバスは必ずしも入門期の生徒に適したものではない。

したがって中学校段階においては、場面と働きの具体的例示を改訂の目玉として捉えるべきではない。これを重要視するあまり、「機能についてのレクチャー」をしてしまうようなことがあれば、これはコミュニケーション能力を育てるという目標から外れてしまうことになる。授業で扱われた文法・構造で遂行可能な機能を取り上げ、復習として機能について重点的に指導するのが現実的な対応だろう。